

一方、自閉症は、タンスの引き出しのある特定の部分に使いにくさがあります。それはひととの関係を作り上げていくときの情報に関する部分（対人認知能力）と、会話を理解したり、やりとりする部分（言語コミュニケーション能力）の使い勝手が目立って悪く、情報の出し入れに当たっても、柔軟性を欠きがちでこだわりが強い（固執性）といった特徴があります。

こうした明らかな特徴を共通してもっているのが自閉症で、知能が遅れているものも、遅れていないもの（高機能自閉症と呼ばれる）もいます。

LDは、ほんのいくつかの引き出しがきしみがちで、出し入れがスムーズに行かないという特徴があり、そのために学校での勉強面で不利を被りやすいのです。

これは1999年に文部省が発表したLDの定義です。

LDとは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

LDは、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

6. LDにはどんなタイプがあるの？

LDは勉強面につまづきやすさをもっていますが、それは子ども
の努力不足ではなく、学びにくさを発達上もっているところに特徴
があります。ですから単なる学業不振とは区別されます。

さてLDにはどんなタイプがあるのでしょうか。LDの実態を把握
するためにつまづきのタイプについてお話しします。

読み、書き、計算のつまづき：読み、書きといった書字の言語や、
計算、論理的思考といった算数・数学領域のどこかに特徴ある学び
にくさやつまづきをもつ、もっとも典型的なLDです。

話しことばのつまづき：聞く、話すといった話しことばの理解や
使用に学びにくさやつまづきをもつLDです。

社会性のつまづき：このタイプは、前ページで説明した「引き出
し」のきしみからくる社会性の育ちにくさと、適切な理解や指導が
されなかった結果として、後から生じる社会性の問題との両方があ
り、区別がつきにくいので定義には含まれませんが、指導上はとて
も大切なつまづきです。

運動のつまづき：発達に障害があると運動面にもつまづきがでや
すくなりますが、LDには、そうしたつまづきをもつものもたな
いものがあります。こうしたつまづきを重複する場合には、仲間
とうまく遊べなかったり、運動やゲームに参加することをさげがち
になることがあるので注意が必要です。

注意集中の欠陥や多動性：LDの約3割に重複するといわれるの
が注意欠陥多動性障害（ADHD）です。重複している場合には、
それぞれの問題への関わり方があるので、きちんとみていかなけれ
ばなりません。

7. わが国におけるLDへの取り組みについて

アメリカでは1960年代からLDへの関心が高まり、1975年から正式に特別な教育の支援対象となっています。義務教育終了後も、大学教育や就労においても、LDへの理解や支援が準備されており、LDということのできるだけ不利を受けることのないようさまざまな努力が払われています。

わが国では1990年に全国のLD親の会ができたことなどをきっかけに、文部省（2001年1月より省庁再編により文部科学省）で公式な検討が開始され、1992年には「LDに関する調査研究協力者会議」が設置されました。

1999年に協力者会議の最終報告が出され、全国的に、LDの判断・実態把握体制に関する新規のモデル事業が開始されるようになりました。

学校・教育機関でのLDの発見・判断から具体的対応方針の策定にあたって、手順として、①校内委員会、②専門家チームによる判断の二段階のシステムが示されています。

「校内委員会」は全校的な支援体制を前提としています。担任ひとりが学級で抱え込んで悩むのではなく、まず学年・学校として、しっかり児童生徒の実態を把握し、有効な対策を校内のチームワークで検討する体制を作るところから始まります。

校内委員会から、さらにもっと専門的な対応が必要と判断された場合には、親の同意のもと、都道府県又は政令指定都市の教育委員会によって設置された専門家チームが専門的な判断を行います。

専門家チームの役割は、LDかどうかの判断だけでなく、望ましい教育的な対応についての具体的なアドバイスをすることです。

第2章 家庭での取り組み

1. 親としての考え方と配慮の仕方

(1) 自分たちの価値観を確かめる

生きていく上で私たちは何を大切にしているか、どんな人になってほしいか、ということ一度ゆっくり夫婦で考えてみましょう。多くの場合、子どもより親のほうが先に死んでしまいます。親である私がいなくなっからこの子たちはどんなふう生きていけるのだろうかと考え、子どもが一人で何とかやっていけるように、長期的な展望に立ち工夫して計画的に子育てに取り組みしましょう。どんな子どもの親であっても、親としては生きていく上でどういうことを伝えたいか、何を教えていきたいか、どんな人間になってほしいか、というところをしっかりと考えていく機会を意識して持ちたいものです。親自身の価値観がしっかり筋が通っていないと子育てはうまくいきません。LDの子どもの親だからこそ、しっかりと先を見据えた賢い子育てが必要です。

LDの子どもは確かに育てにくい子どもかもしれませんが、この子がいなければ人生の上で見落としてしまっていたかもしれない大切なことを、私達はもう見つけているかもしれません…。

(2) 身近に相談にのってくれる人を探す

結果的に既に親になっている私たちですが、完全に最初から親としてでき上がっているわけではありません。子どもを育てる中で不安なことは山のようにあり、隠しておきたい失敗も数え切れません。でも、くよくよしていても始まりません。自分自身が親として修業していくんだというくらいの気持ちで、毎日悩みながら子どもと一緒に頑張ってみようかな、と思えればいいのではないのでしょうか。

そして、不安な時、困った時には一人で思い悩まず、誰かに相談

してみましょう。相談相手として適しているのは、同じような子どもを育ててきた先輩の人達、専門的な知識を持つ相談機関の人などでしょう。この冊子には地域の親の会の情報が掲載されていますから、連絡をとってこれからどうすればいいのか、地域にあった水先案内をしてもらいましょう。親の会の活動に参加することによって、ネットワークも広がり、地域の情報を得ることができます。

(3) あちらこちらの病院を連れ歩かない

いくら相談をするといっても、あちらこちらの相談機関、病院をはしごするのはいただけません。小さいうちは子どもが口に出して言わなくても、初めての場所や人と応じるだけで緊張を感じ疲れるものです。同じ検査を何度も受けてしまうという場合もあれば、そのために正確な結果がでない、ということも起こります。大きくなるにしたがって、「どうしてぼくは病院や〇〇相談所というところに何度も行くのだろう」と自問もします。大人に対する不信感をさらに大きくしないように、節度ある態度をとりたいたいものです。手当たり次第に病院まわりをするのではなく、評判や内容を確認してから行くようにしましょう。

(4) 親の態度に一貫性をもたせる

子どもが同じことをしても、ある場合は叱り別の場面では放っておく、というのでは子ども自身も迷ってしまうでしょう。自分たち親が困ることをするから叱る、というのではなく、善悪の基準に照らし合わせていけないことをすれば叱られ、よいことをすると褒められるということを、ことが起こったその場で教えます。どんな場合にも一貫性のある態度をとること、また学校や場面が変わっても大人は同じように一貫性をもって子どもに対応できるように連携をとっておくことが大切です。

2. 幼児期の取組み

(1) しつけは親の役割

清潔を保つこと、相手に不快感をいだけないように食事ができること、衣服の着脱が一人でできることなどの身の自立、挨拶や感謝、謝罪の気持ちを表すことができることなどはしつけの領域です。しかし、LDの子どもの場合は、計画性をもって意識的に教えていかなければ身に付かない場合が多いと思ひましょう。また、出来ないと思って手助けしていると、いつまでたっても出来るようにはなりません。毎日の生活で繰り返される動作であればあるほど教える機会も多いので、徐々に手助けを減らして自分で出来る部分を増やしていくようにしましょう。

(2) がまんをすることを教える

がまんをすることは、どの子どもにとっても始めはむずかしいものです。でも、ちょっとがまんをしているところを見つけてオーバーなくらい褒めると、子どもは褒められたうれしさから、次にもがまんしようとします。LDの子どもたちはじっとしていることができなかつたり、順番を待つことがなかなか出来なくて、叱られる回数が多くなりがちです。このような場合には叱ってがまんさせるのではなく、親が楽しく待てるように工夫をすることが必要です。「この子は発達が遅れているからこうなんだわ」と親自身が子どもを退屈させない工夫をせず、子ども自身の問題として片付けてしまうことのないように気をつけましょう。「どうして～するの！」「何度言ったらわかるの！」等とできないことを繰り返し責められては、がまんをする気持ちは育ちません。ちょっとしたことをオーバーなくらい褒めてもらえる体験が積み重なって、がまんができるようになるのです。

(3) 身体をつかった遊びをたくさんする

同じ姿勢を一定時間保つ力や、距離感や方向感覚を子どもは戸外での様々な遊びを通して身につけます。いろいろな感触の素材を使つての創作活動も、興味を持ってよく見ようとする力や、手先の巧緻性、形を理解したり記憶する力を養います。



(4) 時を待つ

公園につれていって、周りの同年齢の子どもといっしょに遊べない、ことばの発達が遅れていると気づき、幼稚園で集団についていけないとなると、親としてあせる気持ちや不安になるのが当たり前です。でも「なんとか追いつけ」と、顔をひきつらせて必死で練習をさせたり、お稽古事で毎日をギュウギュウ詰めにしてしまうと、さらに子どもを追い詰めることになりかねません。〇〇ちゃんには〇〇ちゃんのペースがあるのです。そのペースにあわせてあせらず、少しずつ成功体験を増やしてあげるように気を配りましょう。

(5) 子どもの表情に気をつける

子どもは、ことばで上手く伝えられない心の不安や不満を身体の症状や行動として表します。周囲の子どもに比べて幼い状態のまま集団生活が始まると、背伸びをしなければならなかったり、ついていけないことへのストレスも感じていることでしょう。にこにこした笑顔が毎日見られるか、声をあげて心から笑うことがあるか、子どもの表情や様子に心を配っておきましょう。

3. 児童期の取組み

(1) 捨てるものは捨てる

今は大人の私達も高校生の頃は、きれいな科目は超低空飛行でなんとかしのいできたのではありませんか。LDの子ども達には小学校の時期から、親の方で捨てるものを選んであげることが大切です。学校で学ぶ教科の学習事項は、軽度のつまずきを持つ子どもにとっては容量オーバーになる量です。これもあれもできてほしいと要求すること自体が無理ですから、基礎的な内容を大切に、「これだけは理解しておこう」というものを親のほうで選んでいきましょう。例えば、算数なら、「お金の計算」「時計」「計量」はがんばるけれども、「四角形の面積」や「直方体の展開図」は基礎的なことにとどめる、という具合です。

(2) 友達作り

人生の上で友達がいるかないか、それは大きな問題です。同じ年齢でなくてもかまわないので、一緒に何かして楽しいと思える友達を作る機会を意識的に作っていきましょう。友達がいれば「約束をして守る」「譲る」「相手のことを考える」「けんかをしてしまった」といった場面にも出会い、その体験のなかでどう振る舞えば友達に受け入れられるかといったことを学ぶこともできます。学校で対等な友達を見つけることがむずかしければ、親の会等で同じものに興味を持っていて、ペースも似ている子どもとの接点を求めましょう。家族ぐるみの付き合い、地域や親の会の活動に参加するなど、親自身が社会性を発揮する機会を増やしていくことが、子どもの社会性を伸ばすことにもつながっていくということもあります。

(3) 自己理解を促す

高学年になるにつれ、周りの子どもからの指摘や様々な体験によって、自分はみんなとどうも違うようだ、と子ども自身が感じてきま